

「メディア論」再考

——マクルーハンにおける産業社会とナショナリズムをめぐって

新倉 貴仁

はじめに

ナショナリズムとメディアとは、いかなる関係をもつのであろうか。いいかえるならば、ナショナリズムという現象の解明において、「メディア論」はいかなる射程を有するのであろうか。ここでいう「メディア論」とは、技術と身体に関わりに注目し、技術の変容にともなうコミュニケーションと社会の変容を思考する立場をさす。他方、ナショナリズムという現象は、活版印刷術以来の複製技術の進展にともなって生じた人びとの認識様式の変容の総体であり、他者との関係性、生や死の意義づけを含む。

本稿では、マーシャル・マクルーハンの「機械」の概念に注目することを通じて、その言説の背後にひろがる社会的文脈を思考していく。これらの一連の作業は、「メディア論」と呼ばれる視座を再構成する手がかりとなるはずである。

マクルーハンの議論は、「メディアはメッセージである」などの数々のアフォリズムが強調されることによって、その体系的な意味合いは見失われがちである。だが、そこには卓越したナショナリズム論が展開されている。同時に、『機械の花嫁』(1951)、『ゲーテンベルクの銀河系』(1962)、『メディアの理解』(1964)の三つの単著によって織り成されるマクルーハンの一連の議論は、優れた現代社会論でもある¹⁾。

本稿の主張は、この二点にある。第一に、「メ

ディア論」と総称されるマクルーハンの一連の議論は、きわめてすぐれたナショナリズム論でもある²⁾。ナショナリズムとメディア、とりわけ出版資本主義との関係を論じたベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』の議論が、マクルーハンの『ゲーテンベルクの銀河系』に準拠していることはしばしば指摘されることである。だが、マクルーハンのメディア論そのものを、ナショナリズム研究として論じる試みは十分ではない。

第二に、マクルーハンの議論は、産業社会を背景とした現代社会論である。1951年に出版された『機械の花嫁』は、「機械」という問題を重点的に論じながら、「産業社会のフォークロア」という副題をもつ。問うべきは、この「産業社会」の意味である。マクルーハンにおけるメディア論には、その「産業社会」論が先行している。というよりも、メディア論は、産業社会論を母胎として成立している。近年のメディア論は、しばしば、この「産業」という本質的な部分を見落としていないだろうか。

1. マクルーハンをめぐってとその周辺

2011年はマクルーハンの生誕100周年にあたり、河出書房新社から出版される『道の手帖』で、マクルーハンが特集されている。その特集のタイトルは「メディア(論)の可能性を問う」である。インターネットやスマートフォンといった情報技

術のよりいっそうな進展のなかで、あらためて「メディア」を問題としたマクルーハンの議論が週上にのせられているといえよう。また、2000年代に入り、マクルーハンを扱った優れた研究書がいくつも出版されている（服部 2001, 大黒 2006, 宮澤 2008, 合庭 2009, 門林 2009, 柴田 2013）。

これらのマクルーハン研究の成果が主に扱っているのは、邦訳では『メディア論』というタイトルをもつ『メディアの理解』である。「ホットとクール」「メディアはメッセージである」「人間感覚の拡張」「感覚比率」などの、難解で抽象度の高い理論的用語が多いことが、一つの理由であろう。そしてまた、そこで中心的に扱われているものが「電気メディア」であり、その延長線上において私たちの現代社会の重要な特徴となっている「情報化」の意義が測定されるからであろう。

だが、マクルーハンの議論を『メディアの理解』に代表させることは、十分ではない。なぜなら、第一に、そこで展開されている方法論、議論は、すでに『機械の花嫁』や『ゲーテンベルクの銀河系』のなかで先取りされているからである。たとえば、『メディアの理解』に登場する「地球村」の表現はしばしばインターネット時代において呼び起こされ、ナイーヴなユートピアを意味するものとして皮肉に言及される。だが、マクルーハンは、『ゲーテンベルクの銀河系』において、「電磁気をめぐる諸発見が、すべての人間活動に同時的「場」を再創造し、そのために人間家族はいまやひとつの「地球村」とでもいうべき状態のもとに存在していることは確かなのだ」（GG52）と述べる。ここでの「地球村」という表現は、電気時代においてすでに達成されている与件であって、これから到達すべきユートピアではない。むしろ、「村」という表現に親密さと安息の場を見出

すまなごしの方に、都市／農村という二項対立が前提されているといえるであろう。

第二に、マクルーハンの特異な文体は、方法論として、『機械の花嫁』から『メディア論』まで一貫している。マクルーハンは、論証による記述という方法をとらない。そのような方法は、印刷技術がもたらした視角優位の文化の所作であることをマクルーハンは繰り返し強調する。それに代えてマクルーハンは、引用によるモザイク的な構成を対置する。それは、現代社会の記述の方法なのである³⁾。

そして、第三に、『メディアの理解』は『ゲーテンベルクの銀河系』の最後の一文において予告されているように、前著と対になって構想されている。すなわち、その議論の内容と射程は、前著の十分な理解においてはじめて理解できる。

「メディアはメッセージである」や、「熱いメディア」や「冷たいメディア」などの刺激的な表現に目をとられがちだが、マクルーハンの本領は文学や科学、産業技術にまでわたる広汎な歴史記述にある。そして、その現代社会論が優れているのは、この歴史的記述を踏まえているからであり（歴史の現在）、その歴史的記述が魅力的なのは、マクルーハンが自らを取り巻いている現代社会のただなかから歴史を探索しているからである（現代社会の歴史）。

以下では、『メディアの理解』の前半部としての『ゲーテンベルクの銀河系』と、その両者を下支えする議論としての『機械の花嫁』を考察していく。このような試みは、産業社会の中核にある「量 mass」という現象の社会性を探究していくことでもある。この二つの書物は、大量生産 mass production をめぐる議論であり、マスコミュニケーション mass communication という語が登場する大衆社会 mass society について、先駆的に

考察している。

2. ナショナリズム論のなかのマクルーハン

1983年に出版された『想像の共同体』において、ベネディクト・アンダーソンは参考文献の一つとしてマクルーハンの『ゲーテンベルクの銀河系』をあげている⁴⁾。「文化的根源」と題された第二章のなかで、アンダーソンはネーションに固有の想像のスタイルとの同型性を、近代小説と新聞の形式のなかに探りつつ、フェーブルとマルタンによる『書物の誕生』に準拠しながら、書物について、「本は、最初の近代的大量生産工業商品であった」と述べる（Anderson 1991=1997: 61）。『ゲーテンベルクの銀河系』が参照されているのは、この一文についての脚注においてである。その脚注を確認しておこう。

これについては、マーシャル・マクルーハンが、酔狂でいっぱい *Gutenberg Galaxy* (p.125) の中できちんと指摘している。さらに次のことも付け加えておこう。出版市場がたとえ他の商品市場よりずっと小さかったとしても、思想の普及におけるその戦略的役割の故に、出版市場は近代ヨーロッパの発展において中心的重要性をもつと（Anderson 1991=1997: 72-73）。

アンダーソンは、本が大量生産された商品であることを、マクルーハンとともに指摘し、そしてその重要性が単なる市場規模にとどまらないことを強調する。

大量生産された商品としての書物という指摘はきわめて重要な論点となってくる。なぜなら、次の章「国民意識の起源」の中で登場する「出版資本主義」というアンダーソンの創出した概念に深く結びつくからである。これは、二つの意味をも

つ。第一に、それは出版ではなく、出版資本主義である。そして第二に、それは資本主義ではなく、出版資本主義である。

第一の点については、アンダーソンが「資本主義ほど貢献したものはなかった」という一節に脚注を付して説明している（Audersow 1991=1997: 89）。出版は、メディア技術の歴史の考察のなかで、しばしば神格化されてしまう。だが、その背後には常に印刷業者と出版社が控えている。このことはフェーブルとマルタンが、その著書『書物の誕生』のなかでくりかえし強調することであり、また、中国で発明された印刷術がヨーロッパにおいて革命的衝撃を及ぼしたことを考えるうえで重要な要素となる（Febre and Martin 1971=1985）。

第二の点については、アンダーソンの議論の文脈を踏まえる必要がある。それはイギリスの雑誌『ニュー・レフト・レビュー』のなかで繰り広げられていたナショナリズムの論争から派生したものである。『想像の共同体』のなかで、くりかえし参照されるトム・ネアンは、出版の重要性に注目しつつも、ナショナリズムの成立を、資本主義がもたらす不均等発展によって説明する（Nairn 1977）。それに対し、アンダーソンの議論は、あらためて出版、さらには複製技術の意義を強調するものである。

すなわち、一つの特異な想像のスタイルとしてのナショナリズムの成立の背後に、出版あるいは複製技術と、資本主義とが結びついて作動していることへの着目こそが、『想像の共同体』におけるアンダーソンの議論の眼目なのである。そして、この議論はすでに、マクルーハンの『ゲーテンベルクの銀河系』のなかで展開されてきたことなのである。

大量生産を可能にする複製技術の成立と、資本

主義との結びつきは、指摘されれば、ごく当然のことに思われる。産業資本主義は、大量の商品を生産、販売、再生産するサイクルの中で拡大していく。なによりも大量に同じ商品を作り出すことができる能力が資本の集積を可能にする⁵⁾。アンダーソンの『想像の共同体』の一つの重要な業績は、この複製技術にともなう大量生産の原理を、近代ヨーロッパ社会の人の生の様式＝文化としてとらえなおし、きわめて説得的な議論を展開したことにある。そこでは、宗教社会の後退にともなう人々の死についての意味づけの変容の問題があり、比較を通じた世界の分節化の変容が述べられている。「想像の共同体」という魅力的なフレーズを援用して国民国家という対象を考究する作業が繰り返されてきたが、本来、そのポテンシャルは、国民国家の成立をも包含する産業資本主義の体制に向けられているといえる。

アンダーソンの議論から性急に国民国家を批判しようとすることは、それが準拠しているマクルーハンの議論の意義を見落とし、またさらには彼らが取り組んでいる産業資本主義という問題からそれていってしまうであろう。必要なことは、マクルーハンとアンダーソンとを結ぶ、産業資本主義とナショナリズムの関係についての考察を深化させることではないだろうか。そのうえで、はじめて、現代社会におけるネーションの様態を考察していくことが可能となるはずである。このためにも、本稿では、アンダーソンが準拠したマクルーハンのナショナリズム論から、大量生産、産業社会、そして「機械」といった原理を探究していく。

3. 『ゲーテンベルクの銀河系』、ナショナリズム論として

1962年に出版された『ゲーテンベルクの銀河

系』は、きわめて重要なナショナリズム研究の書である。この研究の目的は、書物の前半ではしばしば示唆されるにとどまるが、後半において明確に述べられ、展開される。

くわえて強調されるべきは、このナショナリズムをめぐる議論が「産業社会」をめぐる考察に準拠していることである。この意味で『ゲーテンベルクの銀河系』の議論は、『機械の花嫁』における産業社会論と、『メディア論』において繰り返し論じられることになるナショナリズム論とを結びつける媒介項となる。活版印刷による書物の生産が、商品、市場、価格システムといったものの原型に位置づけられる。これは、産業社会とナショナリズムという問題を、マルクス主義とはまた異なる形において結びつける試みといえる。

とはいえ、マクルーハンはいずれの仕事に対して、きわめて控えめである。何度か繰り返されるように、印刷術とナショナリズムの結びつきは、ハロルド・イニスが先駆的におこなっているものであり、「本書は彼の業績を説明するための脚注のようなものである」(GG79)と述べている。また、先に論じた「最初の、均質で反復可能な、かつ大量生産された」商品としての書物についても、オングの業績に帰している(GG249)。だが、これらの指摘がマクルーハンのオリジナルな議論でないとしても、ナショナリズム論としての『ゲーテンベルクの銀河系』の意義は損なわれない。なぜならこの広範な書物の中で展開される議論は、論点を多岐にのぼし、その点においてアンダーソンのナショナリズム論をも超えるような包括性を有しているからである。

たとえば、「国際的な、聖職にあるエリートたちからなるラテン語本の読者層とはくらべものにならないほど膨大な市場が、自国語本の読者層のものとして潜在していたからであった」(GG317)

という表現は、ナショナリズムの母胎となる出版語の創出と出版資本主義との関係についてのアンダーソンによる説明を先取りしている。また、「均質な時間、均質で連続する空間という抽象的な時間空間」(GG32)という表現は、アンダーソンがベンヤミンから引用してきた「均質で空虚な時間」に重なる。さらに、マクルーハンは、この特異な時間空間の背後に、印刷術という複製技術だけではなく、「透視画法の消失点へと収斂してゆく絵画的空間」の誕生をみている(GG27)。「均質性」、「画一性」、「反復性」といった特徴は、ナショナリズムと印刷技術を結びつけ、さらには透視画法的視点を結びつけるのである。このようなパースペクティブの発明とナショナリズムを結びつける議論は、むしろアンダーソンの『想像の共同体』のなかでは、展開されず、示唆されるにとどまっていると論点である。

『ゲーテンベルクの銀河系』が書かれる背景にあるのは、マクルーハンのある固有の時代認識である。マクルーハンによれば、彼が生きた二十世紀は、「ふたつの構造が遭遇するとその接触領域で変化が生じる」という、「インターフェイス(界面)」あるいは「接触領域性」によって特徴づけられる(GG228)。それは、写本文化から印刷文化へと移行したルネサンス期と比肩しうる時期である。そして、二十世紀は、印刷文化と重なる「機械の時代」から、新しい「電気の時代」へと移行しつつある。すなわち、「今日われわれは五世紀間にわたって続いた機械装置の時代と新しい電子時代、そして均質性の強調と同時共存性が境を接する場所に住んでいる」(GG216)。

ここには二つの論点がある。一つは、本稿でもくりかえし論じてきたように、ナショナリズムが、印刷文化と結びつく機械装置、さらにいえば大量生産と結びつけられていることである。二つ

めは、1962年においてその機械の時代が、新しいエレクトロニクスの技術によって変容しつつあるということである。これは、すくなくともマルコーニまでさかのぼって言及される「電気の時代」においてはじまり、徐々に社会をも変容させていき、そして、いつのまにか前の時代を観察できる地点にまでおしながす。本書はこの地点から書かれている。

だが、マクルーハンの立場は、招来する新しい技術を熱狂的に受け容れるのでもなく、過ぎ去って行く時代を嘆くでもない。ここでのマクルーハンは、いわば到来する技術の潜勢力を測定することを賭け金としている。「この本の主題は印刷が良いか悪いかの問題にあるのではない。印刷であれ何であれ、ひとつの力がもつ効果に対する無意識状態は悲惨な結果を招きがちだ、ということである」(GG376-7)。この意味で、ここでのマクルーハンの議論は、社会に対する技術の力を固定的にとらえるような、技術決定論からは程遠いところにある。

産業社会、産業技術を理解するためには、中世ヨーロッパ世界から近代が立ち上がっていく時期を考察しなければならない。このため、マクルーハンは、数量化の歴史、科学の歴史、数学の歴史を縦横に参照する。そして、これらの広範な領域への参照は、すべて、「あたらしい電子時代」を考察することに向けられ、その課題は、『メディアの理解』へと受け渡される。だが、ここでは、私たちは、マクルーハンが自らの「時代意識」をもつに至った産業社会についての考察をみていこう。それが集中的に展開されたのが、『機械の花嫁』である。

4. 『機械の花嫁』、産業社会のフォークロア

内田隆三は、『機械の花嫁』のマクルーハンの

文体を、一つの社会記述の方法として論じている⁶⁾。それは、私たちが生きる「現在」を描き出すために要請されたものである。『ゲーテンベルクの銀河系』と『メディアの理解』というその後の著書に引き継がれるような、膨大な引用の収蔵庫としての性格といった特徴、さらには、「読む」技術を結集し、さまざまな引用や素材を、配列、解説していく所作は、マクルーハンの方法論の中核となっている。

このような方法論が要請される理由については、「産業社会人のフォークロア」と題された『機械の花嫁』において、繰り返し言及される。もっとも重要なモチーフが、エドガー・アラン・ポーによる『大渦巻』に登場する水夫である。ポーの水夫は、「大渦巻の動きをよく観察し、敢えてそれに逆らう愚を犯すことなく遂に脱出に成功している」(MB 1)。マクルーハンがここで、大渦巻にたとえるのは、「新聞、雑誌、ラジオ、映画、広告などの機械的勢力」(MB 1)である。このような力の奔流は、「機械的、技術的イメージの奔流」(MB 17)、「商品と感覚の大洪水」(MB 215)、「弾幕」(MB 214)などと言い換えられている。そして、「嵐から脱出する手段を見極めるべくその動きを研究すること」が、今なすべきこととして提起される (MB 352)。

実際、この書物のなかで「産業社会」と呼ばれるものが浸透していくさまはすさまじいものがあつたのであろう。『機械の花嫁』には、さまざまな広告が散りばめられると同時に、自動車、マイホーム、死、保険、セックス、統計調査、探偵小説などの主題をめぐって、万華鏡のように議論が展開していく。大量生産と消費の時代にあつて、人びとの生活は「マイホーム」という拠点に収斂していく。家庭は、規格化された装備によってみたまされ、生活もまた規格化していく。そのよ

うな「マイホーム」と対になるかたちで、「探偵小説」がうけいられる (MB 259)

1951年にマクルーハンが相対していたアメリカの産業社会は、いくつもの点で私たちが生きる現代社会と共通している。たとえば、「流行り廃りが目まぐるしく、計画的に忘却を強いられ、変革すること以外には何の意味もない変革が、組織的に推しすすめられていくという社会状況」(MB 36)という認識は、むしろ私たちが生きる現代社会において加速しているものであろう。マクルーハンが論じるアメリカの産業社会は、すでに消費社会への移行が進行しつつあつた。企業は、消費者が習慣や所有物を変えることや捨てることになんのためらいも覚えないように、絶えず刺激を与え、商品の回転を速める。他方、消費者としての現代人には、「現在どんな家に住み、どんな車に乗り、どんな仕事をしているか、そんなことにかかわりなく、不安がつきまとう。現在の人間的、物質的可能性に従つてというよりは、どうなるか解つたものではない将来を気にしながら日々を過ごすようになる」。彼らは、「人間の将来というよりは、来年の新製品の影におびえている」(MB 271)。

このような人間の変容を、マクルーハン「機械」という語を用いて問題としている。それは、「われわれの世界の最も特異な特徴のひとつである」現象としての、「セックスとテクノロジーの混和」であり (MB 226)、またもう一つ「死」という要素を加えた「セックスとテクノロジーと死のこの異常な融合」(MB 242)である。身体が技術と結びつくありさまは、後に展開される「感覚比率」の議論の原型となっている。そして、このような事態をひきおこすものが、同時代に進行しつつある産業社会であり、アッセンブリーラインやオートメーションによる大量生産なのである。

のちの『ゲーテンベルクの銀河系』でも引用されるのだが、マクルーハンは、ダーウィンの学説を通俗化したことで有名なトマス・ヘンリー・ハックスリーが、1868年に『一般教養教育』のなかで、人間を機械やエンジンにたとえていたことをくりかえし強調している (MB 261:334)。引用部分を孫引きしよう。

思うにあの男は一般教養の造詣 a liberal education が深く、しかも若いうちから訓練が行き届いて、あの男の肉体は完全に意志の従僕と化しているのだ。あの肉体は一台の機械装置 mechanism としてできるかぎりの作業を、嬉々として何の苦もなくやっけてのけるのだ。あの男の知能は明晰、冷静、かつ論理的なエンジン a clear, cold, logic engine のように働く。部品のバランスがとれていて、いつでも順調に動く。どんな仕事でもやっけてのける蒸気機関 a steam engine のようなものだ…… (MB 261)

エンジンとしての人間が理想とされ、その数年後には、「[「マイホーム主義 home-loving」]の女性化した中産階級の英雄」(MB 258)となるシャーロック・ホームズが登場する。マクルーハンはこの延長線上に、身体を整える「グラマー娘」、筋肉をつけることに夢中になる「スポーツマン」、そして、性格改造に腐心する「重役」の存在をみてとる (MB 335)。かれらはみな「科学の力」を借りるようであり、「テクノロジー社会の命令にしたがって生物体としての自分の体を一台の機械にかえている」(MB 360)。

このような個々の身体の実践を「機械」として描写すると同時に、マクルーハンは、そこで用いられている「応用科学」や身体管理の技法にも注目している。これは、新しい権力技術である。「巨

大かつ物的な産業権力は、無数の無力な個人の群を前提としている」(MB 305)。そして、「今ではタフであることの本当の意味は、兵站業務とサイバネティクスと市場調査の抽象的な数字の中に現われている」(MB 310-1)。このような統計的なりアリティの拡大は、後に『メディアの理解』のなかで展開される議論である⁷⁾。

ここでの「機械」という表現は、後年の『ゲーテンベルクの銀河系』と『メディアの理解』における、「電気」と対となる「機械」という概念とは、その内実がややずれている。「機械の花嫁」における「機械」は、産業社会の原理であると同時に、技術を通じた人びとの身体を変容させたものを名指すために用いられている。「機械」と「電気」の双方がまだ分かれ合っており、理論的には未成熟であるといえるかもしれない。しかし、同時にそれは、二項対立による切断からまだ免れているともいえる。マクルーハンが取り組む現在性という時間には、「機械」と「電気」という二つの原理が混在している。それゆえ、「機械」と「電気」が切断されてしまうことなく、産業技術の発展にともなう大量生産から、統計的なりアリティのせり出しへの移行が記述されている。

これはナショナリズムとメディアという問題系において、きわめて重要である。なぜならこの二項対立による図式化を通じて、マクルーハンの議論が、「電気」の時代に偏ってしまうからである。だが、ナショナリズムの問題は「機械」と「電気」という二つの原理の混在のなかで前景化したのではない。そして、産業社会の内部で起きている決定的な変容は、「機械の時代」と並行してきたナショナリズムに対しても決定的な変質をもたらすのではない。問うべきは、この変容である。

おわりに——メディア論の課題

本稿で展開してきた主張をまとめよう。第一に、産業社会の構成、産業技術の歴史を考えるためには、グーテンベルク以来のヨーロッパ社会の変動を改めて考え直す必要がある。そして、それは大量生産された「商品」という形態の出現の歴史であり、数量化の技術がきわめて重要なものになっていく歴史である。

第二に、ネーションおよびナショナリズムは印刷文化ときわめて深く関係する。このことは、1962年当時マクルーハンが「電子時代の到来」として彼の現代を描いていたことと結びつけられなければならない。産業社会の変容は、ネーションおよびナショナリズムの変容をひきおこす。そのとき、なおもそれをナショナリズムと呼ぶかという問題は、あらためて考えなくてはならない問いとなるであろう。

第三に、技術の変容は、その社会を構成する人々の身体をも変容させる。工場、学校、軍隊のいずれもについて、マクルーハンが印刷術による画一性や均質性の効果として描き出している。このような均質な個人の創造は、フォーコーの規律訓練権力が切り開く問題に結びつくであろう。そして、それが技術の変容とともに変わってきているのであれば、個々の身体や意識を含んだ人間存在の変容自体が問題とされなければならない⁸⁾。これはそのような身体の変容をひきおこす「権力の政治技術論」（内田 1987：215）の問題を開示する。そして「機械」から「電気」という移行に従うのであれば、現代社会においては新しい権力技術と新しい身体が登場しつつあるといえる。

「メディア論」は、それが成立した背景としての産業社会へと差し戻されて再構成されなければならない。もし「機械」から「電気」という産業社会の変容を受け容れるなら、そこでは、ナショ

ナリズムはある種の失効を宣告されている。そして、1950年代のアメリカの産業社会の延長としての現代社会において、マクルーハンが論じる「機械」と「電気」といった対比の理論的意義があらためて考察されることになる。「メディア論」の賭け金とは、以上のように変容する産業社会の解明にある。

ここにはいくつかの考えるべき課題がよこたわっている。第一に、第二次大戦後、産業社会を消費社会へと変容させていくオートメーションをはじめとした一連の技術について、その社会的な考察という課題がある⁹⁾。日本において戦後社会とはいかなる社会であったのか。そして高度成長とは何であったのか。こういったことが「メディア論」において考察されるべき課題となるであろう。

そして、第二に、エリオットやジョイスといった産業社会の中における思考の系譜の探究という思想史的な課題がある。これは、日本でいえば、戦前の中井正一や戸坂潤のみならず、戦後の花田清輝や藤田省三など、高度成長にともなう社会変容の波に押し流されるなかで見失われてしまう思考の系譜を探索することにつながっていくであろう。

注

- 1) McLuhan (1951=1991; 1962=1986; 1964=1987). 以下、『機械の花嫁』からの引用はMB、『グーテンベルクの銀河系』からの引用はGG、『メディアの理解』からの引用はUMで示す。
- 2) このことは『メディアの理解』においても変わらない。「社会的に見ると、活字印刷という形をとった人間の拡張は、国家主義、産業主義、マス市場、識字と教育の普及というものをもちこたした。なぜなら、印刷は正確に反復可能なイメージを提供し、それが社会的エネルギーを拡張させる、まったく新しい形態を刺激したから

だ」(UM175)。また、「方言および言語の集団によって人間を政治的に統一するというのは、個々の方言が印刷によって広大なマス・メディアに変ずる以前には考えられないことであった」(UM180)。

- 3) 翻訳者である森常治は、その構成方法と、エリオットの『荒地』のモザイクの方法との類似性を指摘している (GG484)。

- 4) アンダーソンとマクルーハンの結びつきについては、しばしば見落とされてしまうものである。たとえばベネディクト・アンダーソンについての論文集『比較の地平 Ground of Comparisons』では、多く著名な論者が寄稿しながらも、マクルーハンの文献を参照したものはない。

吉見俊哉は『メディア時代の文化社会学』所収の論文「歴史のなかのメディア変容」において、活版印刷の発明と「最初の、均質にして反復可能な〈商品〉」、「最初の大量生産方式」との結びつきを指摘し(吉見 1994: 81)、さらに「すでにマクルーハンも、印刷術が、民族語をマス・メディアという閉じられた系へと変質させることにより、近代ナショナリズムの画一的にして中央集権的な社会空間を創りあげたことを強調していた」と述べる(吉見 1994: 87)。そして、「マクルーハンやアイゼンシュタインによるこうした認識は、ベネディクト・アンダーソンによって深められている」(吉見 1994: 87)と述べ、アンダーソンの「出版資本主義」についての議論を的確に紹介している。

- 5) この点に関し、フェーブルとマルタンは「印刷術の出現は、この意味において、大衆・規格化文化への一段階であった」と述べ、この一節を、アンダーソンは『想像の共同体』のなかで参照している (Anderson 1991=1997: 88)。

- 6) 「だが、マクルーハンがそれらの図式を用いたのは、彼が歴史の現在についての「神話的な記述」を試みていたからではないだろうか。……おそらく神話とは、過去となり歴史化される手前にあり、「現在性」という形式においてわれ

われがまさにそのなかに巻きこまれ、所属し、生きている、この世界そのもののことではないだろうか。われわれは歴史と未来のあいだの、実は「神話」でしかありえない現在——距離を置いたり、相対化したりすることが本質的に困難な「現在」という位相——を生き続けている。われわれはこの現在がわれわれに語りかけている言葉を、ある意味ではわかっていると同時に、ある意味では何もわかっていないのである。マクルーハンの記述が焦点を合わせようとしているのは、われわれの社会のこの「神話としての現在」なのである」(内田 1999: 189-190)。

- 7) 「われわれがチューイングガムに手を伸ばすたびにコンピューターに鋭く記録され、些細な動作まで新しい確率曲線あるいは社会科学のなにかパラメーターのようなものに変換されるところまで来ている……。われわれの個人および集団の生活がインフォメーションのプロセスと化してしまっているのは、われわれが中枢神経組織を電気の技術という形で、われわれの外部に出してしまったからに他ならない。これが、ブーアスティン教授が『イメージ——アメリカの夢の行きつくところ』のなかで語った困惑を解く鍵である」(UM534)。

- 8) 「身体とはわれわれの世界への埋め込まれ方であり、世界との関係を触発するメディアである……身体が権力の政治技術論の操作対象＝マチエールであるのも、この根本的な事実によって、メディアとしての身体という観点はマクルーハンにも見られる。身体の本質的なメディア性を具体的に外在化したものが、通常、われわれがメディアと呼んでいる道具や機械である……身体の新しい拡張段階は、電磁メディアの出現、エレクトロニクスのあらゆるメカニズムへの浸透によって可能となり、それは従来の身体図式や意味＝感覚の地平の全面的な編み直しを促すことになる」(内田 1987: 214)。

- 9) 『メディアの拡張』は「オートメーション」を最終章としている。「自動制御 cybernation (ま

たは自動化 automation) ……は活動の様式を現わすだけでなく、思考の様式をも現わすものといわれている。サイバネーションは個々の機械に寄せるのではなく、生産という問題を、情報処理の統合された体系とみなすものである」(UM254)。また、「フィードバックは、アルファベットとともに西欧世界に到来した線条性とユークリッド空間の連続的な形態が終わりを告げたことを意味する。フィードバックは、言い換えれば、メカニズムとその環境との対話であり、したがって、個々の機械の内部にとどまらず、さらにその機械を工場全体の機械群が構成する銀河系の中へ組み込んでいく」(UM372)。戦後日本におけるオートメーション技術の導入と、その社会学的意義については、新倉 (2016) を参照。

参考文献

- 合庭惇, 2009, 『ハイデガーとマクルーハン』 せりか書房。
- Anderson, Benedict, [1983], 1991, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London; New York: Verso. (=1997, 白石さや・白石隆訳『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT出版。)
- Culler, Jonathan and Cheah, Pheng eds., 2003, *Grounds of Comparison: Around the Work of Benedict Anderson*, Routledge.
- 大黒岳彦, 2006, 『〈メディア〉の哲学』NTT出版。
- Febvre, Lucien and Martin, Henri Jean, 1971, *L'apparition du livre*, Paris: Albin Michel.
- (=1985, 関根素子・長谷川輝夫・宮下志朗・月村辰雄訳『書物の出現』筑摩書房。)
- 服部桂, 2001, 『メディアの予言者——マクルーハン再発見』廣済堂出版。
- 門林岳史, 2009, 『ホワッチャ ドゥーイン, マーシャル・マクルーハン?』NTT出版。
- McLuhan, Marshall, 1951, *The Mechanical Bride*, Beacon Press. (=1991, 井坂学訳『機械の花嫁』竹内書房新社。)
- , 1962, *The Gutenberg Galaxy: The Making or Typographic Man*, University of Toronto Press. (=1986, 森常治訳『グーテンベルクの銀河系——活字人間の形成』みすず書房。)
- , 1964, *Understanding Media: The Extensions of Man*, McGraw-Hill. (=1987, 栗原裕・河本仲聖訳『メディア論——人間拡張の諸相』みすず書房。)
- Nairn, Tom, 1977, *The break-up of Britain: Crisis and Neonationalism*, London: New Left Books.
- 新倉貴仁, 2015, 「戦後社会とオートメーション—工業化社会から消費社会への変容の技術的条件」『マス・コミュニケーション研究』(86)
- 宮澤淳一, 2008, 『マクルーハンの光景——メディア論がみえる』みすず書房。
- 柴田崇, 2013, 『マクルーハンとメディア論——身体論の集合』勁草書房。
- 内田隆三, 1987, 『消費社会と権力』岩波書店。
- , 1999, 『生きられる社会』新書館。
- 吉見俊哉, 1994, 『メディア時代の文化社会学』新曜社。
- 『KAWADE 道の手帖 マクルーハン』河出書房新社, 2011。

Revisiting McLuhan's Media Theory: Focusing on the Relationship between Nationalism and Industrial Society

NIIKURA Takahito

Abstract

Benedict Anderson's *Imagined Communities* (1983) has been considered to be one of the most significant pieces of literature on the relationship between nationalism and media. However, it has been often overlooked that Anderson's concept of nationalism is heavily influenced by Marshall McLuhan's arguments on printing media in *The Gutenberg Galaxy* (1962).

The aim of this article is to reframe the relationship between nationalism and media by revisiting McLuhan's arguments on industrial society.

Firstly, *The Gutenberg Galaxy* is reframed as an outstanding theoretical work on nationalism. It sheds light on the history of mechanical reproduction, which catalyzed the formation and spread of nationalism.

Secondly, *The Mechanical Bride* (1952), which underlies *The Gutenberg Galaxy* as well as *The Understanding Media* (1964), is reconsidered as an outstanding attempt to scrutinize contemporary society in the context of the huge transformation resulting from the progress of industrial technologies.

In conclusion, McLuhan's work, focusing on nationalism in the context of the industrial society, provides us with an effective viewpoint from which to rethink the problem of nationalism even in the context of contemporary globalization and the advent of information society.

KEYWORDS: Marshall McLuhan, media theory, nationalism, industrial society, mechanical reproduction